

本来、スポーツは人間にとって肉体と精神のバランスを保つ手段であるべきです。その手段が現代社会の中では目的となつてしまつてゐる。そこから生まれる様々な問題について、私は仕方がないと目をつぶることはできないのです。

体操、山登り、カヌーそして柔道。私とスポーツの付き合いは短くありません。とりわけ柔道と私のラブ・ストーリーは20年を越え、主人より古い付き合いです。

もともと体を動かすことが好きだったので、柔道にはそれに加えて、ゲーム感覚があります。柔道の乱取りでは、相手の体型や動き方、技術のレベル、心理状態に応じて技をかけます。そして私のかけたその技に対する相手の反応と、さらにそれに対する私の反応などが、まるで全身を使ってチェスをしている気分にかけてくれるのです。

肉体的、精神的両面の健康のために人間が創った運動。これが私にとってのスポーツの意味です。スポーツは必ずしも生活の糧のような、人間が生きて残るためにしなければならないというものではありません。

実際、スポーツは人間の社会では新しい現象です。機械文明のおかげ(せい)で、労働の苦しみから逃がれることのできた産業社会に生きる人々が、労働に向けられていた肉体のエネルギーを使う必要性を感じるようになるまで、現在の意味でのスポーツは無かつたと思います。昔の生活は今に比べてもっ

と肉体を使つていました。だから一日の仕事を終えた後に、筋肉を使つたり汗をかいたりする必要を、感じなかつたのではないのでしょうか。現在のスポーツは、肉体的な面で欲求不満を感じる仕事の性質上のニーズから生まれたものと言えるでしょう。それに加えて、特に小さな子供が発揮する、しかし大人も決して無くしてはいない「より速く、より高く、より速く」といった遊戯本能も、現在のスポーツに大きな意味を持っていると考えられます。

そもそもスポーツは健康のためにあるべき、と考えている私に大きな疑問を感じさせることがあります。それは、オリンピックの種目の幾つかに見られるのですが、強化トレーニングをする年齢が下がっていくことを許すだけでなく、当然と考えるようになってしまつた点です。例えば体操。やつと10歳を過ぎたばかりの女の子がオリンピックに出場して来ます。そのレベルに達するためには、少なくとも5〜6年前から、毎日5〜6時間のトレーニングをしなければならなかつたことでしょう。さらにその子供たちは、トレーニングと同時に、毎日5〜6時間の義務教育

も受けているはずで、彼女たちの一昨日、そして将来を思うと、おそろしさを感じる程です。

苛酷で強制労働のようなスケジュール。肉体の成長への障害。(ある国では注射でメンスの時期を人為的に延ばすという話を聞いたほどです。)常に記録を破り続けなければならない精神的プレッシャー。失敗やケガをした時の回り知れないショック。彼女たちは本当にこんな犠牲を覚悟して、自分自身の選手生活を選んでいるのでしょうか。とても疑問です。

私はこう思うのです。野菜は無理して育ててもあまり害はない。(本当は無理なく育てた方が良く私は思いますが。)だが、人間の子供を無理して育てると害は大きいと。

そんなスポーツ・トレーニングの低年齢化を、「仕方がない」という人がいます。何が仕方がないのか私には判りません。皆が喜んでその傾向をエスカレートさせているから、仕方がないのでしょいか。皆がやっているからですか。それが間違ひであつてもですか。私たちの住む現代社会が、常軌を逸した判断を示すことは、初めてではあ

りません。今の社会では、手段を目的とすることが習慣化しています。例えば、「生産すること」は人間のより良い生活の手段であるべきなのに、今では逆に、「生産すること」に自分の人生を提供しなければならなくなっています。同様に、学校の試験の点数は、教育の手段であるべきなのに、試験の点数を教育の目的にしています。

だからスポーツでもその手段と目的の関係が逆になっているからといっても、あまり驚くことではないのかも知れませんが、人間がスポーツに従うのではなく、人間がスポーツに従つてしまつても……。

しかし、私は考えます。スポーツはあくまでも人間にとって肉体と精神のバランスを保つ手段であるべきです。そしてこれは不変であるはずで、スポーツが人間の肉体的、精神的な問題を生み出す源泉になることは、ナンセンスです。

しかし、今、私はもっと常軌を逸したおそろしいことを感じ始めています。そのナンセンスがコンセンサスになってきているのではないかと……。『オデュールにしきおり』柔道愛好家。21歳から柔道を始めて現在3段。1945年、フランス生まれ。滞日20年。